

高田 本山 だより

令和最初の本山だよりをお届けいたします。
お念仏の中核となるだけではなく
地域の宝として歩み続けています。

危険

118



寺内町の環濠清掃で境内も綺麗にして頂きました

令和に始める 高田本山の基礎知識

今更聞けない



●たかだほんさん

「高田本山」の本当の名前は真宗高田派本山専修寺です。親鸞聖人が開かれた真宗高田派の本山というところで高田本山と親しみを込めて呼ばれています。

●たかだ

「高田」の名称は栃木県真岡市高田の地が発祥です。この場所に親鸞聖人が訪れた時に一夜にして土地が上がってお寺を建てるに相応しい場所になったことがこの名前の由来になっています。

現在もこの地には高田本山と同じ名前の「専修寺」があり、善光寺ゆかりの阿弥陀三尊が秘仏として安置されていて、十七年に一度ご開帳のご縁があります。

●せんじゅじ

お寺の名前は「専修寺」と言います。一心にお念仏する事を「専修念仏（せんじゅねんぶつ）」と言い、この文字に名前は由来します。

●なもあみだぶつ

「南無阿弥陀仏」とお念仏をして皆が救われていく道を親鸞聖人が示してくれました。その道をまっすぐ受け継ぐ高田派は「念仏高田」とも云われていました。

●きょうぎようしゅうもんるい

省略して「教行信証」といわれることが多い親鸞聖人の著書ですが、正しくは「顕浄土真実教行証文類」と申しますので、省略して表す場合「きょうぎようしゅうしんしゅう」と云わず「教行証文類」と申します。



●りゅうようぼだいじゅ

高田派の紋になっている「柳葉菩提樹」は栃木の高田の地で親鸞聖人が虚空蔵菩薩より柳と菩提樹を授けられた話のもとになっています。御影堂の前にも一対、植えられています。

●ごかいさん

「親鸞聖人」の事を、真宗を開かれた聖人という事で「御開山聖人」とお呼びします。ここ専修寺と栃木の専修寺にはそれぞれの御廟に親鸞聖人のご真骨が納められています。

●さんぶきよう

お念仏のよりどころとなる浄土の経典として「仏説無量寿経」「仏説観無量寿経」「仏説阿弥陀経」があり、「三部経」と総称しています。報恩講の日中には順番にお勤めされています。余談ですが、無量寿経の下巻には新元号に使われている「令」と「和」の字を見つけることができます。



WEB VERSION

WEB VERSION

参拝
記念

●ごしゅいん

令和になって色々話題になっていますが、参拝記念の「御朱印」を進納所で受けていただくことができます。専修寺では納経の証ではなく、あくまでも参拝記念としておりますので、本堂へのお参りも忘れずにお願いたします。

●おしちやさん

「お七夜」さんで知られる高田本山で最も大事にされるお参りが「報恩講（ほうおんこう）」です。親鸞聖人のご命日に合わせて七夜八日にわたる法要が毎年賑やかにつとまります。

●じんちよう

三百六十五日、途切れることなく「晨朝」のお勤めが通常七時からございます。そして、お勤めに引き続いてお説教もありますので、一日をご本山から始めてみるのいかがでしょうか。

●おとどけまいり

「お届け参り」は、本山の御廟に納められている親鸞聖人の御遺骨のお側に亡くなられた方の分骨を納めて浄土往生のご報告に上がることです。ここ高田本山には高田派のお同行だけがお届け参りをすることができます。少しでも聖人のお側にという気持ちを大事にして、綿々と続く風習です。

●おまむきさま

ご家庭の仏壇の中心に安置する阿弥陀さまの掛け軸を「お真向」さまと言います。ご本尊は本山から下附していただくのが本来ですので、本山の案内所で受けていただければと思います。

例えば、お仏壇に木像の阿弥陀さまが最初からある場合には、本山中で「お裏書」と呼ばれる軸を受けていただき、一緒に安置してください。

●ごくほう

高田本山には三重県唯一の国宝建築があります。「御影堂（みえいどう）」と「如来堂（にょらいどう）」

また、「西方指南抄（さいほうしなんしょう）」や「三帖和讃（さんじょうわさん）」といった親鸞聖人ゆかりの書物も国宝として大切に保存されています。

■訂正とお詫び

高田本山だより1117号・2ページ目3段目の「高田沂源論」の読みは「たかだそげんろん」です。訂正とお詫びを申し上げます。

WEB VERSION

WEB VERSION

こんな行事がありました



大涅槃図

三月十五日

大涅槃図公開

今年は二十四日の讃佛会の終わりまで如来堂に掲げられてお参りする事ができ賑わいました。

三月二十六日～二十八日

中学生教化合宿

栃木の本寺専修寺と、東京の関東別院を尋ねる中学生対象の合宿旅行では、本寺での清掃奉仕やデイズニールランドでの楽しいひと時があり盛況のうちに幕を閉じました。



本寺での清掃奉仕
(中学生教化合宿)

四月六日～十一日

春千部法会



山門釈迦三尊

春千部に合わせて十万人講法会、戦没者追弔法会も厳修されました。またお釈迦様の生まれた八日には山門の釈迦三尊のお参りと宝物館前の佛足石のお参りもありました。

四月十七日・五月二十二日

真宗入門講座

教学院主催の講座も恒例で開催されています。



関東別院で記念撮影
(中学生教化合宿)

四月二十一日 花まつり

誕生仏への甘茶かけや

白象の行進で賑わいました。合わせて写生大会の表彰も行われ、高田本山賞に加山奈実さんが選ばれました。



白象を引いて練り歩きます



5/22 開催の真宗入門講座



お子さまの
本山初参り
風景

親鸞聖人ご旧跡を訪ねて

第12回 松任倉部川のご縁



本誓寺



照台寺の藤

今回ご紹介するのは、倉部川にゆかりのある石川県松任^{まつとう}周辺の親鸞聖人御旧跡です。前回は手取川でしたが、各地に川を越えるということがらにちなんだ伝承が残っているようです。

本誓寺は、同寺の円貞法師が夢で金色の菩薩が寺に入る夢を見たことにより、倉部川の辺りにお迎えに上ると親鸞聖人がおいでになったということで真宗のお寺に変わったと云われています。一般的には幽霊の絵で知られているお寺です。また、法の道^{のり}まばらは遠き競川^{くらべがわ} 弥陀は松任近渡^{わた}しぶねという歌が伝わっています。

照台寺は、この時お迎えした中にいた同寺の念和上人ゆかりの寺で、境内には親鸞聖人お手植えの藤の大木がそびえています。

本誓寺は松任駅南口から徒歩8分、照台寺は野々市工大前駅から徒歩7分です。(山川 蓮生)

本寺での花まつり行列



四月七日に本寺専修寺涅槃堂にてお釈迦様の生誕を祝う「花まつり」が開かれました。

煌びやかな衣装を着たお稚児さんたちが白象を引き、総門を通りぬけ如来堂、御影堂を参拝した後に涅槃堂（釈迦涅槃像）前にて法要を執り行い、その後本寺輪番より皆様へご挨拶をさせて頂きました。

桜が綺麗に咲き誇るなか、お釈迦様に甘茶をかけ、子どもたちの健やかな成長を願いました。

お稚児さんたちの笑顔や笑い声にあふれた「花まつり」となりました。



関東別院での灌仏

三月二十三日、小雪舞う季節外れの中、関東別院にて「花まつり」を厳修致しました。

当日は生憎の天気でしたが、午前中の法会から始まり白象を携えての稚児行列、お釈迦様への甘茶かけと午前中は子どもたちの声で賑わいました。

午後は「宝生流」の公演をいただきました。初めて観る方も多く、場内は興奮に包まれておりました。

また、院内職員によるお釈迦様を表題にした法話会も開かれました。

普段の法会とは違い、華やかな賑わいに溢れた一日となりました。

発表風景の一コマ



四月二十九日

興学布教研究大会

高田学会主催となる大会が開かれました。

五月二十一日～二十三日

第十八世圓遵上人二百年忌

第二十一世堯淵上人百年忌

二十一日には親鸞聖人降誕会が開かれ、本山表彰などが合わせて行われました。引き続き、両上人の御年忌が三日間にわたり厳修されました。



降誕会で本山表彰

五月三十一日

第68回檀信徒研修会

今回も八十名あまりの参加をいただき、賑やかに研修会が開催されました。

真宗とは何かという事に焦点を当てて「おかげさまの生活」というタイトルで岡崎の戸田恵信師に講演をいただき他、歴史や作法について引き続きの講義をいただきました。

分散会も含め丸一日充実した研修会となったようです。次回は、十月二十三日です。ご参加をお待ちしております。

檀信徒研修会



WEB VERSION

WEB VERSION

「ケシの実」

釈尊シリーズ ⑮



智慧と慈悲の心にあふれた釈尊の元には悩みや苦しみを抱えた人々が絶えず相談に訪れていました。ある日のこと、キサー・ゴータミーという女性が腕に幼子を抱え駆け込んできました。しかしその子どもは誰の目にも既に死んでしまっていることはあきらかでした。長年待ち望んだ我が子を失ったキサー・ゴータミーが半狂乱となり、生き返らせる薬を求めて町をさまよい歩いているところを、道行く人に教えられ釈尊のところに来たのでした。

「薬をください。私の子どもを生き返らせる薬をください。」とすがるように訴えます。「よろしい、あなたの望みをかなえてあげましょう。町へ行き、

ケシの実を分けてもらってきなさい。」キサー・ゴータミーの顔がぱっと明るくなりました。「ただし、そのケシの実は今まで一度も死者を出したことのない家から分けてもらわなくてはいいけません。」

釈尊の言葉を聞き終えると、彼女は町へと飛び出して行きました。ところがどの家を訪ねてもケシの実はありません、一度も死者を出したことのない家など町中に一軒もなかったのです。やがてキサー・ゴータミーが戻ってきましたが、彼女の腕の中にあの子どもの姿はありませんでした。

「私は今まで、我が子がなぜ死んでしまったのか。どうしてこんなに悲しい思いをしなくてはならないのかと苦しんで参りました。」ぼつりぼつりと語り出します。「しかし、どの家を訪ねても家族の誰かを亡くしていることを告げられました。誰もがいずれは必ず死んでゆかなければならないということに、ようやく私は目が覚めました。」そう語るキサー・ゴータミーの表情は穏やかで、その目には深い慈しみの光を宿していました。我が子を失った悲しみを縁として、世の無常を身をもって覚ったのでしよう。釈尊は丁寧にキサー・ゴータミーをねぎらい、彼女の志を讃えました。彼女は出家して釈尊の弟子に加わり、女性出家者の先駆けとなりました。

(教学院第三部会)

WEB VERSION

WEB VERSION

私が今この文章を書いているのが平成三十一年四月下旬、後数日しないうちに新元号に変わります。平成から令和へと新しい時代の始まりです。振り返ると平成という年は昭和の六十四年間と比べたら約その半分の時間で幕を閉じることになりました。ですが時代と共に変化してきたモノも多くあります。平成最初の携帯電話は（私が使ったことのあるモノになってしまいますが）長方形の電話でPHSという物でしたが、今はパソコンとほぼ同じ性能を持つスマートフォンになり、技術の進歩は今もなお続いています。

時代が進むにつれて高度な物になり、既にあるお掃除ロボットや乗り物の運転手の無人化が計画、実験されていたりと、私達の生活は豊かで便利になっていきます。

しかし、どれだけ便利になっても、モノで満たされていても昔から変わらないものもあります。私たち人間です。医療技術がいくら発達しても命は尽きます。これはお釈迦様が生きていた時代、またそれよりも前からある当たり前の理（ことわり）です。永遠のテーマです。

昔と比べれば男性女性共に平均寿命は延びましたが、寿命が来たらそこで命が尽きます。昔から変わりません。変化しないものはない、これを仏教では『諸行無常』^{しよぎやうむじやう}と言います。私たちは『今日は疲れた。明日続きをしよう』

リレー法話 いのち 南無阿弥陀仏、 南無阿弥陀仏。

神奈川組成就院衆徒
釋遼徳

『明日から本気出す』『明日することにしよう。先延ばしだ！』と思つて眠りに就きます。

明日が、もっと言えば未来が来る前提で生活をしています。ですが、必ず明日が来るという保障はどこにもありません。夜、寢床に入り眠りにつきますが、朝目が覚める保障はありません。私たちは明日が『来る』と思つて生活していますが、しかし物事は常に変化しています。『もしかしたら明日死んでしまつかもしれない』、でも私たちが働いている時、また夜眠っている時でも、

時間は進みますし私達の体内では常に新しい血液が造り続けられています。それが当たり前の日常だからです。

親鸞聖人は『明日ありと思つ心の徒桜^{あたざくら}、夜半の嵐の吹かぬものは』と詠まれています。これは聖人が得度する時に詠ま

たので『明日もまだ桜は咲いていると思つているが、夜更けに嵐が来て桜の花を散らすことが無いと言えようか、そんなことは無い』という意味です。

必ず明日を無事に迎えられる保障はない、ということです。当たり前の日常が本当は大事な時ということです。

お釈迦様の時代も、親鸞聖人の時代も、現代もそれは変わりません。この今という一分一秒を大事に生きるほか私たちには出来ません。今一度、この元号が変わるのを機会に自分の生き方を見つめ直してみたいと思います。

合掌

WEB VERSION

WEB VERSION

● 行事案内

六月三十日

みえ県民茶会

問合せは三重県茶道協会

七月二十日

金谷俊一郎 講演会

往復ハガキでの申し込み
が必要です。詳しくは本
山HPまたは、講演会の
チラシをご覧ください。

問合わせは宗務院広報課

七月三十日～三十一日

歴史丸ごと体験塾

(小学生教化合宿)

小学校五・六年生対象

問合せは津市教育委員会生涯学習課

八月一日～五日

第93回仏教文化講座

一日 法主殿御親講

二日 佐々木閑先生

三日 井上尚実先生

四日 藤田正勝先生

五日 藤田正知先生

八月十四日～十六日

歓喜会

九月二十日～二十六日

讃佛会

九月二十日

仏教保育合同参拝

十月二十五日～二十七日

定専上人六百五十年忌

堯真上人四百年忌

汗を流して清掃奉仕

ご奉仕ありがとうございます。(敬称略・奉仕日順)

三月 泉光寺・西勝寺・慈相寺・勝鬘寺・清雲寺・泰應寺・近縁寺・迎接寺

四月 願成寺・法泉寺・光徳寺・仲安寺・浄蓮寺

五月 法林寺・みかんの里・西方寺・圓福寺・唯称寺

本山の清掃奉仕で汗を流しませんか。ひとりひとりの力が合わさり山内が
護持されています。お申し込み、お問い合わせは宗務院庶務部までお願いし
ます。

寺院名

高田本山



Senjuji

 三重県津市一身田町
2819
真宗高田派本山専修寺

金谷俊一郎 講演会

高田本山の歴史も国宝級！
世界一楽しくわかりやすい専修寺の授業

日時：7月20日(土)
17:30開演
会場：高田会館ホール

事前申込み必要
入場無料

お問い合わせは本山宗務院広報課まで tel:059-232-4171 email:koho@senjuji.or.jp